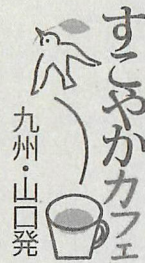


様々な治療納得し選択を

子宮にできる良性の腫瘍「子宮筋腫」は、月経のある女性の4人に1人にあるとされる。無症状なら経過観察が原則だが、貧血や頻尿に悩まされる例も多い。手術や薬物療法に加え、体にメスを入れない治療として「子宮動脈塞栓術(UAE)」も広がっている。専門家に治療の現状と課題を聞いた。

(芦原夕奈)



■ 体への負担少なく

子宮筋腫は子宮にできる腫瘍で、大きさは数ミリから10センチ超のものまである。女性ホルモンの影響で成長し、悪性になることはない。ただ筋腫の位置や大きさにより、出血量が多くなる「過多月経」と貧血、膀胱の圧迫による頻尿などになる。強い痛みのほか、不妊の原因になることもある。

久留米大福岡県久留米市医学部放射線医学講座の小金丸雅道准教授は「日常生活に支障がなければ、経過観察が通常だが、痛みが強い場合は受診をためらわないでほしい」と呼びかける。



UAEについて話す小金丸准教授

子宮筋腫

主な手術には、筋腫だけを切除する「子宮筋腫核出術」、筋腫を含めた子宮を全て摘出する「子宮全摘術」がある。核出術は妊娠の可能性を残せるが、全摘術に比べて出血量が多いことが多い。再発の恐れもある。

他に薬物治療や放射線を利用した画像下治療(IVR)などもあるが、近年、普及してきたのが、体への負担が少ない子宮動脈塞栓術(UAE)だ。太ももの付け根の血管から細い管を入れ、粒状の物質を注入。子宮動脈の血流を詰まらせ、筋腫への栄養補給を遮断することで筋腫を縮小させ、症状の改善を図る。外科的手術を望まない人や持病があり、リスクの高い人らの希望が多い。久留米大病院は2016年からUAEを導入し、

これまでに約60件の治療を行ってきた。子宮を温存する治療であるUAEは、子宮にがんがないかを確認する必要があることなどから、同大では放射線科と婦人科が連携し、治療を行っている。

■ 適切な治療法を

大分県日田市の女性(57)は、久留米大病院で治療を受けた。生理時の出血が多く、貧血の悩みを抱えてきた。17年に治療を受けた際、術後5日間で退院した。現在も経過観察で年数回通院しているが、症状は改善した。女性は「別の病院では子宮の全摘出を勧められたが、母親の介護もあり、長期入院はためらわれた。子宮を残せたのも、本当に良かった」と振り返る。

デメリットもある。受精卵の着床障害を起す恐れがあるという。妊娠を望む人は対象外だ。UAEは14年から保険適用となった。適用前は70万円ほどの自己負担が必要だったが、現在は10万円前後で受けられるようになり、少しずつ認知度は高まってきた。しかし、今もUAEを知らないまま、外科的手術を選ぶ患者がいるという。

小金丸准教授は「UAEの一般の認知度はまだまだ低い。子宮筋腫の治療法は多岐にわたる。それぞれのメリットやデメリットを知り、納得して選ぶことが重要です」と話す。

今回は4月14日の予定です。

◆ 子宮筋腫の主な治療法

治療法	メリット	デメリット
子宮筋腫核出術	<ul style="list-style-type: none"> 妊娠の可能性が残せる 基本的にどの子宮筋腫にも適用可 	<ul style="list-style-type: none"> 出血量が多いことがある 再発の可能性がある
子宮全摘術	<ul style="list-style-type: none"> 子宮筋腫の症状が完全になくなる 再発の心配がない 	<ul style="list-style-type: none"> 妊娠できなくなる 喪失感が残る場合も
子宮動脈塞栓術(UAE)	<ul style="list-style-type: none"> 局所麻酔での治療が可能 傷がほとんど残らない 入院期間が短い 	<ul style="list-style-type: none"> 将来、妊娠を希望する場合は適用できない 再発や再治療の可能性もある